

# 部・同好会の歴史

## 化学部

わが化学部は少人数ではあるが、化学に関心をもった同好者達のおつまりで、20年間小さい炎ではあるが燃え続けている。昭和50年前後には、公害問題に関心をもつ者もあり、分析を中心とした活動を続けた。その研究成果は、他校との交流会、文化祭などで披露してきた。その後みんなの中から「在学中に何か形になるものを作り思い出しよう」という声がわきあがった。さっそく七宝焼き・香料・和紙の製造の班に分かれそれぞれがとりくんだ。その中で今も続いているのが和紙の製造である。さっそく総社の山中にあるといわれているガン皮の木さがし、それに続いて老人より聞いたり、書物で調べ手さぐり状態でとりかかった。皮をはぐ者。カセイソーダ煮をする者。繊維をたたく者。ノリの役目をするトロロアオイの球根は、まだ手に入らない。しかし粘度が低いと繊維の分散は悪い。しかたなくCMCを準備する者、巻きずしのスの上ですいたがスの目が荒いため繊維が裏までまわりスからはがれない。変形したが板へはりつけてかわかした。かわくまでが待ちどおしい。スよりはがし出来上がった和紙を手にしたときの部員達の顔。手すき和紙の製作に成功。

翌年には、西阿知駅周辺にコウゾがあることを知った。これは終戦後国鉄が植え、日の目をみえないものである。さっそくコウゾをいただいた。それから約2年間。コウゾ和紙の製作にとりかかった。ガン皮と同様に行なったが、その調子にはいかなかった。スより和紙をきれいにはがすことができなかった。行き詰まった。その時、和紙作家丹下哲夫さんを訪問し、いろいろお教をいただき、解決の糸口をつかんだ。そして丹下さんの手づくりのスもいただいた。早速、部員達は初歩からやり始めた。どうにか使える和紙もできあがった。これから先の大きなはげみになった。このような活動をしている中で、和紙のキャンバスに同じ和紙を絵の具代わりにした絵画制作にに取りくんだ。ナスやキュウリなどが和紙の表面に浮き上がり、油絵の重厚さと日本画のぼかしもミックスした独特な作風をかもし出した。その年の創作展にも出品し注目をひいた。さらに手づくり和紙を

テーマに本年も活動を続けている。本年は紙の原料を、西阿知特産のイ草を用いた。しかしこのイ草はタタミ表の製造中の不要な部分である。これを用いて1学期間研究を続け、どうにか使用にたえる紙ができあがった。2学期からは、本格的に、イ草和紙の製造にとりくみ、20周年目の記念になるものを残したいと意気込んでいる。

(顧問 小野記)